体育授業におけるいじめの被害者に対する第三者の援助抑制要因

The Help Restraint Factors of the Third Party toward the Victim of Bullying in a Physical Education Class

吉 村 功 : Koh YOSHIMURA

北海道教育大学函館校 : Hakodate Campus, Hokkaido University of Education.
1-2 Hachiman-cho, Hakodate, 040-8567

Abstract

The first purpose of this study was to clarify the factors that restrain the help behavior of the third party toward the victim of bullying in a physical education class. The second purpose was to examine the influences that these factors have on the help attitude.

The questionnaire survey about the reasons for not helping the victim in spite of having recognized bullying in physical education class and about the help attitude was conducted on the third grader (139 children) in an elementary school, the fifth grader (149 children) in an elementary school, and the second grader (213 students) in junior high school.

The results of a factor analysis were as follows:

- 1) Avoidance from the danger of a retaliation ("Factor 1")
- 2) Refusal of involvement in fear of negative evaluation from peers ("Factor 2")
- 3) Denial of the help duty by blame attribution to the victim ("Factor 3")

Each factor was compared in terms of the grade difference and sex.

Furthermore, the following results were shown about the influences that these factors have on the help attitudes of each grade.

- 1) Third grader in an elementary school : "Factor 2">"Factor 3"
- 2) Fifth grader in an elementary school : "Factor 2"
- 3) Second grader in junior high school : "Factor 3">"Factor 1">"Factor 2"

はじめに

現代の学校が抱える問題の一つとしていじめがある。いじめはむかしからあったとはいっても、今日のいじめは、日常化、ゲーム化、集団化、構造化、巧妙化、陰湿化、長期化、正当化、といった特徴をもち(江川, 1995, pp. 23-30)、深刻な問題へと変貌している。このような特徴をもつ今日

のいじめの定義として、鈴木(2000)は「ある特定の一人に、他の一人ないしは複数の者が繰り返す、或いはよってたかって、精神的、身体的苦痛を与え続ける比較的長期に亘る屈曲した攻撃行動(黙殺、無視を含む)を伴った、精神的又は身体的圧迫である」と述べている。また、高野(1991)は「圧倒的に強い立場にある者(あるいは集団)が、

反撃の余地をもたない弱い立場にある者(あるいは集団)に対して、ことばや態度や比較的軽度の身体的攻撃によって、主に心理的な苦痛を与える行為」と示している。そして学校におけるこのようないじめは、ごく限られた現象ではなく、回顧的調査(深谷, 1996)や実態調査(森田ほか, 1999)からも、かなりの頻度が報告されている。では、体育でのいじめに関しては、どのような認識を持てばよいのであろうか。

体育授業におけるいじめについて、竹之下(1987)は、体育授業は往々にして勝ち負けをめぐる競争が中心となりやすく、また、身体活動を伴う技能の優劣があらわになりやすいために、もし勝ち負けだけを強調する授業を行うとするならば、いじめを助長することにつながっていく、と述べている。大平(1987)は、体育授業は学習形態が「集団と競争」の形をとることが多いために、しばしばいじめの論理と同様の集団と力の論理を生み出し、時としてそれらを無意識のうちに助長する場となりうる危険性があることを示唆している。すなわち、体育はそのあり方次第で、いじめを助長する危険性を含んでいると考えることができる。実際に、体育授業におけるいじめの実態を回顧的に調査した出口・吉村(1999)の報告によると、大学生の約27%が、小学校から高等学校までの体育授業において、いじめを経験していることが明らかにされている。さらに出口・吉村は、学習形態、学習内容、体育教師、学習者のあり方が、いじめを助長する要因であることを示している。これらのことから、体育授業において、いじめは現実には発生しているものと理解でき、いじめの防止・対処について検討する必要があると言える。

ところで、森田・清水(1997, pp. 46-52)は学級におけるいじめ集団の構造について、現代のいじめは、いじめっ子(加害者)といじめられっ子(被害者)という関係だけで起こるわけではなく、まわりではやしたてたりおもしろがって見ている子(観衆)と見て見ぬふりをする子(傍観者)という四層構造が密接に絡み合っていると指摘している。ここで特に問題とされるのは、観衆と傍観者であろう。江川(1995, pp. 38-40)は、観衆や傍観者はいじめの支援者であり、いじめを維持す

る要因になっていることを指摘している。ただし、森田・清水(1997, pp. 151-164)も述べているように、これらの観衆や傍観者がいじめの仲裁者の立場に立てば、多くのいじめは抑制できるものと思われる。したがって、観衆や傍観者といった第三者は、いじめの助長や抑制に働きかける重要な存在であり、彼らのいじめに対する援助行動によって、いじめの防止や解決への糸口を見出すことが可能となるであろう。しかしながら現代のいじめは、前述のように、このような第三者が被害者に対して援助行動をとらないことが、重大な問題としてあげられる。

それではなぜ、第三者は被害者に対して援助をしないのであろうか。正高(1998, pp. 102-103)はいじめを容認する二つのメカニズムを述べている。一つ目は、本来は暴力行為は良くないと感じていた価値判断が「親だって同じ状況下だったら私のようにするだろう」と信ずることによって、許容へと変質する過程。二つ目は、「もうちょっと多くのクラスメートが暴力に批判的になるなら自分も同調するのだが」と、洞ヶ峠を極め込む作用、である。すなわち、いじめは良くないと感じていても、周囲の仲間が援助を示さなければそれに同調され、かつ、援助行動をしない自分を正当化するものと思われる。さらに山崎(1986)は、観衆や傍観者といった第三者の「自分には関係ないから」「他の人が何とかするから」といった考えや、「いじめられっ子が悪いから」といった考えが、援助抑制と強い関係にあることを示している。しかしながら、体育授業におけるいじめの被害者に対する第三者の認知構造を扱った研究はほとんどなされておらず、この方面での研究の必要性があると考えられる。

そこで本研究では、体育授業におけるいじめについて、第三者が被害者に対して援助行動を抑制している要因を明らかにし、これらの要因が援助態度とどのような関係にあるかを検討することを目的とした。なお本研究では、体育授業におけるいじめとして、運動が苦手であったり不得意であるために、他者からの中傷を受ける場面を取り上げた。これは出口・吉村(1999)の体育授業でのいじめの実態調査の結果、いじめられる原因のうち、過半数以上の割合を占めていた要因である。

もちろん、量的な多さだけが問題となるわけではない。しかしながら本調査の実施上、場面を設定することが必要となるため、今回は上記の場面に視点を当て研究を進めることにした。

方 法

1. 調査対象者

本調査では、前述の目的について検討する際に、小学生から中学生における発達段階の違いからも検討を加えることになる。そこで、H市内の小学3年生151名、小学5年生157名、中学2年生226名の計534名に対し、平成10年10～11月に調査を実施した。そのうち、小学3年生139名、小学5年生149名、中学2年生213名の計501名から有効資料を得、これらの者を調査対象者とした。有効回答率は約93.8%であった。

2. 調査内容

まず、調査項目を作成するために、上記とは別の小学3年生32名、小学5年生36名、中学2年生71名の計139名を対象とし、体育授業でいじめを認知しているにもかかわらず、被害者を援助しない第三者を想定した物語を提示した。そして、なぜ援助しないのかについて、自由記述による回答を求めた予備調査を実施し、得られた回答を分類、整理したところ、46項目が抽出された。

本調査では、以下のような物語を提示し、上述の46項目について、それぞれ「かなり思う」「まあまあ思う」「少し思う」「思わない」の4段階評定尺度による回答を求めた。なお、得点が高いほど、援助を抑制する程度が高いことを意味する。

<物語>

今日の体育はバスケットボール。最近ではみんな上手になってきて授業は盛り上がっています。しかし、グループ対抗のゲーム中、運動の苦手なビリーちゃんは、失敗ばかりで、チームメイトのアブルちゃんに、「下手くそ、じゃまだ」とか「ビリーがいなければ勝てるのに」などと悪口やイヤミを言われ、つらそうにしています。クラスみんなはその様子をおもしろがったり、あるいはただだまって見えています。サードちゃんもそんな中の一人です。

さらに、被害者に対する第三者の援助態度として、山崎（1986）が示した「いじめ解消への期待」「援助動機認知」「援助行動予測」について、「かなり思う」「まあまあ思う」「少し思う」「思わない」の4段階尺度で回答を求めた。各援助態度の具体的な質問内容は、以下の通りである。なお、得点が高いほど、援助に対する態度が高いことを意味する。

「いじめ解消への期待」：あなたはこのようなことがなくなってほしいと思いますか。

「援助動機認知」：あなたはビリーちゃんを助けたいと思いますか。

「援助行動予測」：あなたはビリーちゃんを実際に助けますか。

3. 調査方法

本調査の実施に際し、各学校長の許可を得、さらに各担当教諭の協力を得て、集団調査を実施した。

結果と考察

1. 体育授業でのいじめの援助抑制要因

46項目のうち、フロア効果が生じたと思われる30項目を除き、16項目について主成分分析・バリマックス回転を行った。因子数は固有値1以上によって決定し、3因子が抽出された。このときの累積説明率は47.5%であった。因子の解釈は、因子負荷量の絶対値が.40以上の項目の内容から検討した（表1）。

第1因子は、“アブルちゃんに反抗するとクラス全体が気まずくなるから”、“アブルちゃんがこわいから”、“ビリーちゃんを助けるとアブルちゃんに嫌われるかもしれないから”といった、加害者に対する恐れや仕返し等の危険性を避けるために援助をしないという内容であり、「報復の危険性からの回避」と命名した。第2因子は、“かかわりたくないから”、“みんなにいい子ぶっていると思われたくないから”、“止めようとしておせっかいだと思われたくないから”といった内容であった。これらの内容は、もしも援助をしたならば周囲からの冷たい視線が気になる、言い換えると、周囲の者が援助に対して否定的に評価するのではないかという不安であり、これが援助への関与を

表1 援助抑制項目の因子分析の結果

番号	項 目 内 容	FI	FII	FIII	共通性
14	アブルちゃんに反抗するとクラス全体が気まづくなるから	0.670	0.098	0.151	0.481
9	アブルちゃんがこわいから	0.670	0.230	-0.157	0.526
4	ビリーちゃんを助けるとアブルちゃんにきらわれるかもしれないから	0.653	0.165	0.019	0.454
3	ビリーちゃんを助けるとサードちゃんも悪口やいやみを言われるから	0.633	0.357	-0.087	0.536
17	サードちゃんが止めてもアブルちゃんは悪口やいやみを続けると思うから	0.569	0.125	0.398	0.498
38	ビリーちゃんを助けるとサードちゃんも仲間はずれにされるから	0.543	0.495	-0.093	0.549
33	かかわりたくないから	0.050	0.724	0.173	0.557
29	みんなにいい子ぶっていると思われたくないから	0.311	0.668	0.110	0.555
37	注意したいが勇気がないから	0.358	0.638	-0.136	0.554
43	止めようとしておせっかいだと思われたくないから	0.204	0.540	0.336	0.446
36	どのようにビリーちゃんを助けていいかわからないから	0.350	0.435	0.146	0.333
11	ビリーちゃんはもっと練習をすべきだから	-0.025	-0.033	0.772	0.598
1	ビリーちゃんは下手なのでしかたがないから	0.011	0.170	0.642	0.441
26	ビリーちゃんが自分自身でなんとかすべきだと思うから	-0.150	0.435	0.568	0.534
15	サードちゃんも下手だから	0.378	-0.041	0.444	0.342
31	ビリーちゃんを助けたらビリーちゃんはもっとひどいめにあうと思うから	0.299	0.229	0.249	0.204
因子寄与		2.991	2.609	2.007	7.607
因子寄与率 (%)		18.7	16.3	12.5	47.5

抑制していると考えられる。そこで第2因子を「評価懸念による関与の拒否」と命名した。第3因子は、“ビリーちゃんはもっと練習をすべきだから”、“ビリーちゃんは下手なのでしかたがないから”といったように、援助をしない理由を被害者の運動技能の低さに帰属した内容だと考えられる。そして、“ビリーちゃんが自分でなんとかすべきだと思うから”は、自己の援助義務を否認する内容である。高木（1998, pp. 110-113）は、援助行動の抑制要因の一つとして、「援助規範からの意図的な逸脱とそれに伴うサンクションの軽視」をあげている。これは、援助を求める原因がその人自身にあるから自分で問題を解決すべきであり、他人がわざわざ関わって助ける必要はない、という意識である。本研究で得られた第3因子もそれと類似している。すなわち、援助をしない理由を被害者に帰属させることで自己の援助義務を否認していることから、「被害者への原因帰属による援助義務の否認」と命名した。

2. 尺度の信頼性と妥当性

まず、尺度の信頼性を検討するために、全対象者、小学3年生、小学5年生、中学2年生ごとに

クロンバックの α 係数を算出した。その結果、表2に示すように、.819～.828の高い値を得、尺度の内部一貫性が確認された。次に、尺度の妥当性については、本研究で得られた各因子は、山崎（1986）の学級でのいじめへの援助抑制要因項目の因子と大枠で対応しており、また、内容的には体育授業に特有なものもみられた。これらのことから、構成概念妥当性を満足している尺度であると考えられた。

表2 尺度の信頼性（クロンバックの α 係数）

	全体	小学3年生	小学5年生	中学2年生
クロンバックの α 係数	.828 (n=501)	.822 (n=149)	.819 (n=139)	.825 (n=213)

3. 学年別および性別による各因子に対する意識の比較

各因子の標準因子得点を算出し、表3に示すように、学年（小3・小5・中2）×性（男子・女子）の2要因分散分析を行った。その結果、いずれの因子においても交互作用に有意差は認められなかったが、学年の主効果および性の主効果は有意であった。

表3 援助抑制の各因子得点の平均および分散分析の結果

因子名	小3男	小3女	小5男	小5女	中2男	中2女	主効果	交互
	n=63	n=76	n=80	n=69	n=104	n=109	学年 性	作用
F I 報復の危険性 からの回避	-.001 (1.030)	.091 (.998)	-.254 (.964)	-.042 (.949)	-.108 (1.096)	.253 (.897)	†	*
F II 評価懸念による 関与の拒否	-.058 (1.011)	-.566 (.954)	-.245 (.892)	-.309 (.885)	.494 (.938)	.332 (.904)	**	**
F III 被害者への原因帰属 による援助義務の否認	.484 (1.021)	.149 (.914)	.143 (.853)	-.316 (.840)	.173 (1.126)	-.453 (.893)	**	**

* () は標準偏差を表す。

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

まず学年の主効果についてみると、第1因子の「報復の危険性からの回避」については、有意な傾向が認められ ($F_{(2,495)} = 2.37$, $p < .10$)、Fishier の PLSD 法を用いた多重比較を行ったところ、中学2年生 > 小学3年生 $\approx$ 小学5年生の関係が認められた。したがって、中学生は小学生よりも、加害者に対する恐れや仕返し等を避けようとする意識が強いものと思われる。通常、いじめの加害者は力関係で優位に立っている場合が多い。そしてこの関係は中学生の方がより顕著であり、報復の危険性を避けようとする意識が強く働いているものと考えられる。第2因子の「評価懸念による関与の拒否」については、有意差が認められ ($F_{(2,495)} = 35.41$, $p < .01$)、多重比較によって、中学2年生 > 小学5年生 $\approx$ 小学3年生の関係が認められた。思春期は自我意識に目覚めると同時に、他者に見られているという意識が強くなる (返田, 1986)。また Staub and Sherk (1970) は、10歳以降の年齢になると他者の存在による援助行動の低下が表れることを示している。これらのことから、中学生は周囲からの評価を懸念するために、援助への関与を拒む意識が高いものと考えられる。第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」については、有意差が認められ ($F_{(2,495)} = 10.50$, $p < .01$)、多重比較によって、小学3年生 > 小学5年生 $\approx$ 中学2年生の関係が認められた。第3因子は、被害者の立場に立つ共感性や道徳性に規定されるものと思われる。そしてこれらは、年齢とともに発達するものであり (中里, 1985; 高木, 1998)、小学3年生は他と比較し、第3因子への意識が高かったものと考えられる。

次に、性の主効果についてはいずれの因子においても1%水準で有意差が認められ (第1因子: $F_{(1,495)} = 6.40$ 、第2因子: $F_{(1,495)} = 8.36$ 、第3因子: $F_{(1,495)} = 29.64$ 、第1因子では女子が男子より高く、第2、第3因子では男子が女子より高かった。すなわち、女子では加害者からの報復を避けようとする意識が援助を抑制し、そして男子では周囲の目を気にし、いじめの理由を被害者に帰属する意識が援助を抑制しているものと思われる。このような性差における理論的背景については、今後さらに検討すべきであるが、観衆や傍観者といった第三者の問題を考える際、性差および前述の学年差を考慮することの必要性が、本結果より示唆された。

4. 体育でのいじめにおける第三者の援助抑制要因と援助に関する態度との関係

援助に関する態度得点 (いじめ解消の期待)、「援助動機認知」、「援助行動予測」の3項目の得点の合計) を目的変数とし、援助抑制要因の3つの因子の標準因子得点を説明変数とした重回帰分析を行った。説明変数間の相関係数は、いずれも .01 以下であり、多重共線性の問題は見られなかったと判断した。表4には、援助に関する態度得点の平均値と標準偏差が、対象者全員、および小学3年生、小学5年生、中学2年生ごとに示してある。また表5には、上述の重回帰分析で求められた標準偏回帰係数の結果が、対象者全員、および小学3年生、小学5年生、中学2年生ごとに示してある。

まず全対象者についてみると、援助抑制要因のすべての因子について有意な標準偏回帰係数 (β) が認められた。次に、第三者の援助に関する

態度を規定する援助抑制要因を、影響度の大きい順に各学年で見ると、以下のようになる。

小学3年生：第2因子>第3因子

小学5年生：第2因子

中学2年生：第3因子>第1因子>第2因子

これらのように、援助態度に関わる各援助抑制要因の影響度に発達的な違いが示された。なお、説明率は必ずしも高いとは言えない。しかし、いずれにおいても有意性が示されたこと、さらには、援助に関する態度を規定する要因は、本研究で捉えた援助抑制要因だけでなく、他の要因が存在する可能性は十分にあることを踏まえた上で、以下では各発達段階の特徴について考察する。

まず小学生では、第2因子の「評価懸念による関与の拒否」が、もっとも大きな負の β を示していた。各学年を男女ごとに同様の分析を行った結果でも、第2因子の β が $-.25 \sim -.35$ で、いずれも最も大きな影響を示していた。大きな負の β が示されたということは、周りの他者からどう思われるか気になることが、援助に関する態度を弱めていることを意味する。前述の第2因子に対する意識に関する学年比較の結果から、小学生の第2因子に対する意識は中学生よりも低かったものの、援助態度を規定する要因としての影響度は大きいということを考慮すべきである。すなわち、小学生においては、もしも援助をしたならば、周囲の者から否定的に評価されるのではないかという不安が援助態度を消極的にさせており、このような思考をいかに変容させていくかが重要となるであろう。また、小学3年生では、第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」は、2番目に大きな負の β を示していた。前述の第3因子に対する意識に関する学年比較の結果から、小学3年生の第3因子に対する意識は、他の学年よりも大きい。すなわち、小学3年生では、運動能力が低いからいじめられても仕方がないといった認識をし、その意識が援助態度を弱めている。したがって、彼らのこのような意識にどう対応していくかということも、これからの課題として考えていかなければならないだろう。

中学生においては、第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」が、もっとも大きな負の β を示していた。中学2年生の第3因子に

対する意識は小学生よりも低い。前述の第3因子に対する意識に関する学年比較の結果より、中学2年生は小学3年生における意識ほど高いわけではない。しかし、援助態度に与える影響度は高く、「運動が下手な人はもっと練習をすべきであり、いじめられても仕方がない」といった意識を持ってしまうと、援助態度を弱めてしまい、いじめとの関わりを避けるようになってしまうようである。また、中学生の特徴として、第1因子の「報復の危険性からの回避」が2番目に大きな正の β を示していたことがあげられる。有意な正の β が認められたということは、報復の危険性を意識している者ほど、援助態度が高いということの意味する。この結果についてより詳細に検討するために、男女ごとに重回帰分析を行ったところ、女子については有意な β は認められず、男子について有意な正の β が示された。そこで、男子について、援助に関する態度の3項目を独立させ、第1因子と「いじめ解消の期待」、第1因子と「援助動機認知」、第1因子と「援助行動予測」の単相関係数をそれぞれ求めた。その結果、第1因子と「いじめ解消の期待」および第1因子と「援助動機認知」に1%水準で有意な正の相関が認められ($r=.30$, $r=.31$)第1因子と「援助行動予測」には有意な相関は認められなかった。これらのことから、加害者からの報復の危険性を避けるために援助ができない者ほど、いじめがなくなしてほしい(「いじめ解消の期待」)、あるいは、被害者を助けたい(「援助動機認知」という気持ちが強いものと思われる。ただし、実際に援助できること(「援助行動予測」)とは結びついていない。体育でのいじめる側の特徴として、体力的に優り、運動能力も高いということが考えられる。中学生の男子ではこのような傾向が顕著であるため、第三者個人がいじめる側と向き合って、自らの力で援助行動を起こすことは容易ではない。したがって、第三者が援助行動を起こすには、第三者同士のつながりや協力が必要になるものと思われる。しかしながら、正高(1998, pp. 104-127)は、いじめ批判に同調する仲間の少なさが、いじめを容認するメカニズムの一つであることを示している。さらに正高は、限界質量の考え方をを用い、援助行動が発揮されるには、58%以上の同調者が必要であると述べてい

表4 援助に関する態度得点の平均値と標準偏差

援助に関する態度得点	全体 n=501	小3 n=139	小5 n=149	中2 n=213
平均値	9.8	10.9	10.4	8.7
(標準偏差)	(2.22)	(1.80)	(1.70)	(2.29)

表5 各予測変数の援助に関する態度に与える影響 (β の結果)

予測変数	全体	小3	小5	中2
F I 報復の危険性 からの回避	.12**			.20**
F II 評価懸念による 関与の拒否	-.35**	-.32**	-.30**	-.15*
F III 被害者への原因帰属 による援助義務の否認	-.22**	-.16†		-.44**
R^2	.18**	.16**	.10**	.27**

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

る。力関係の強い加害者に立ち向かうことへの多くの同調を得るということは、学習者としての第三者だけが担う問題ではなく、体育授業における教師の役割も問われることになるであろう。

まとめ

本研究では、小学3年生、小学5年生、中学2年生を対象として、体育授業におけるいじめについて、第三者が被害者に対して援助行動を抑制している要因をまず明らかにした。その結果、「報復の危険性からの回避」「評価懸念による関与の拒否」「被害者への原因帰属による援助義務の否認」の3つの因子が抽出された。これら3因子について、学年別及び性別による比較を行ったところ、以下の結果が示された。すなわち、第1因子の「報復の危険性からの回避」については、学年では中学2年生、性では女子の意識が高かった。第2因子の「評価懸念による関与の拒否」については、学年では中学2年生、性では男子の意識が高く、第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」については、学年では小学3年生、性では男

子の意識が高かった。

次に「援助解消の期待」「援助動機認知」「援助行動予測」を含む援助態度を目的変数とし、上記の3つの援助行動抑制因子を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、小学生では第2因子の「評価懸念による関与の拒否」が大きな負の β を示し、また小学3年生では第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」も有意な負の β が認められた。一方、中学生では、第3因子の「被害者への原因帰属による援助義務の否認」が大きな負の β を示し、さらに中学生男子においては、第1因子の「報復の危険性からの回避」に有意な正の β が認められた。

これらのことから、援助行動抑制要因や援助態度に対する援助行動抑制要因の影響度には、発達的な違いや性別による違いが明らかにされ、今後の対応に向けての1つの示唆を得ることができた。さらにこれらに加え、以下のような検討課題も考えることができる。

- 1) 「報復の危険性からの回避」について：援助したいという気持ちがあったとしても、援助に何

らかの出費（コスト）が伴うため、援助行動が抑制されてしまうのではないか。

2)「評価懸念による関与の拒否」について：援助したいという気持ちがあったとしても、周囲の者の存在から受ける心理的影響によって、援助行動が抑制されてしまうのではないか。

3)「被害者への原因帰属による援助義務の否認について：援助すべきという道徳的な義務感が生じていないために、援助行動につながっていないのではないか。

今後は、これらの問題にも視点を当てた研究を進める必要があろう。

謝 辞

本研究に関し、多大なるご協力をいただきました北海道七飯養護学校の出口博昭教諭に、心より感謝の意を表します。

文 献

出口博昭・吉村功（1999）体育授業におけるいじめの実態及びいじめの助長・解消に関わる要因の検討。北海道教育大学紀要（自然科学編）**30**（1）：101-110。

江川 成（1995）いじめから学ぶ－望ましい人間関係の育成－。大日本図書：東京。

深谷和子（1996）「いじめ世界」の子どもたち－教室の深淵－。金子書房：東京。

正高信男（1998）いじめを許す心理。岩波書店：東京。

森田洋司・清水賢二（1997）いじめ－教室の病い－。金子書房：東京。

森田洋司・滝 充・奏政春・星野周弘・若井彌一（1999）日本のいじめ－予防・対応に生かすデータ集－。金子書房：東京。

中里至正（1985）道徳的行動の心理学。有斐閣：東京。

大平力（1987）小学校における「いじめ」と体育授業。体育の科学**36**（4）：276-280。

返田健（1986）青年期の心理。教育出版：東京，pp. 62-64。

Staub, E. & Sherk, L. (1970) Need for approval, children's sharing behavior and reciprocity in sharing. *Child Development* **41**: 243-252.

鈴木康平（2000）学校におけるいじめの心理。ナカニシヤ出版：京都，p. 29。

高木修（1998）人を助ける心－援助行動の社会心理学－。サイエンス社：東京。

高野清純（1991）いじめのメカニズム。教育出版：東京，p. 6。

竹之下悟（1987）いじめと体育授業の役割。体育の科学**36**（4）：294-297。

山崎洋（1986）いじめにおける第三者の援助態度を抑制する要因。日本教育心理学会第38回大会発表論文集：266。

（平成14年4月24日 受付）
（平成14年7月23日 受理）